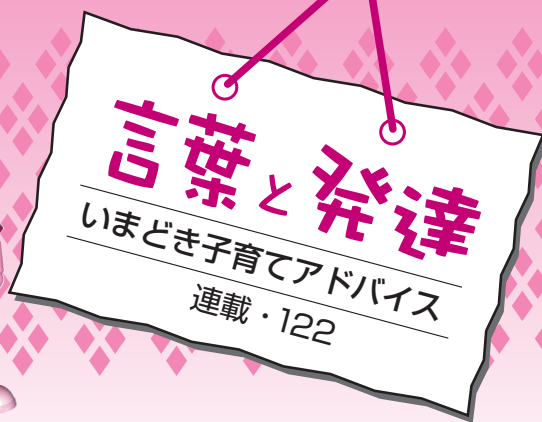




守 破 離

「型を教える」から 入る子育て



言語聴覚士 中川信子

習慣を身に付ける

知的障害のある小学生の妹と、そのお兄ちゃんを育てている親御さんの話を読みました。妹のほうは毎日学校から帰るとすぐ「お母さん、はい」と連絡帳と学校からのプリントをクリアケースごと渡してくれるので、学校からの連絡事項や提出物が滞ることはほとんどありません。

ところが高校生のお兄ちゃんは、いまだにそれができない。中学、高校と世界が広がるにつれて、連絡事項は複雑かつ多くなるので、本人が自覚しないと、どうしようもありません。親がうるさく言うにも限度があります。本人だって、彼なりに努力しているみたい。でも事態は一向に改善しないとか。妹には、知的障害があることが早い時期から分かっていました。理解が遅い

子なのだから、身に付くのに時間がかかる親も自覚して、本人に分かりやすい方法をあれこれ考え、できたら大いにほめることをしながら忍耐強く教えてきました。特に生活習慣が身に付くには反復が必要と分かっていたので、日常のこまごましたことを意識的に、繰り返し教えてきました。そのためプリントを出すことは、習慣としてすっかり身に付いたようです。

一方、兄に関しては成長とともにいつか自然にできるようになると考えて、意識的にきちんと教えることをあまりしてきませんでした。教えることをしないで置いて、失敗すると「なぜ、できないの!」と責めることばかりやってきてしまいました。大きくなってから何かを習慣化するのは、とても大変だと兄を見ていて思います。小さいうちから細かく教え、ほめながら習慣化してやればよかったと反省しきり。

んが、この数値はかなり信頼できます。ところで「知的障害がない」すなわちIQが70以上あれば通常クラスでやっていけるのかといえば、実際上は多くの困難があります。

1年2組のKくんは6歳6カ月。IQ70と分かりました。IQ70とは、知的発達がその年齢の70%に到達していることを意味します。6歳6カ月の月齢換算は78カ月です。78カ月×0.7＝55カ月＝4歳7カ月。つまり、Kくんは生活年齢6歳6カ月だけれど、知的発達は4歳7カ月ということになります。4歳7カ月といえば、保育園・幼稚園の3歳児クラスの後半か、4歳児クラスの前半といったところ。1年生のクラスに4歳の子が交じって文字や数の勉強をしている姿を想像すれば、なかなか理解できないことは想像に難くありません。

学校は、社会性を育てたり、お友達

子どもを育てるには手をかける必要がある。これは、障害のあるなしに関係なくどんな子にもあてはまる事実。なのに、なまじ通常の子を持つと、親はそんな簡単なことにも気づくことが難しい……。障害がある、と分かるとかえって一生懸命取り組むことができるのに、と。

私もいろいろ考えさせられました。

特別支援教育元年

平成19年は特別支援教育スタートの年です。従来の特殊教育の対象であった知的障害・肢体不自由・視覚障害・聴覚障害・病虚弱児にプラスして、発達障害といわれるお子さんたちへの対策を講じるようにすることが大きな変点です。

特別支援教育が念頭に置く発達障害とは、「知的障害はないけれども「学

と楽しく遊んだり、給食をおいしく食べたりする場所でもありますが、なんといつても勉強をする時間が一番大きな比重を占める空間。能力に合わないことをしなくてはならない子ども自身が幸せであるのかどうか、考えなければならぬところ。



1年生の中に4歳児が...

習に著しい困難があるとか、注意欠陥多動性障害の行動特性があるとか、広汎性発達障害（自閉症スペクトラムという言い方もある）の傾向があるなどのお子さん全体、ということ。このあたりは、まだまだ用語的にも、概念的にも混乱中というのが正直な印象です。渦中にいる私自身も時々「あれ?」って思っちゃう。『地域保健』2007年3月号の特集「発達障害の早期発見と早期支援」を読み直してみてください。

ちよつと横道ですが、「知的障害はないけれども」、場合の「知的障害」とはIQ（知能指数、時に発達指数）で70に満たないものをいい、IQ50～70前後だと「軽度知的障害」もしくは「軽度精神遅滞」、IQ70～85だと「ボーダーライン」「境界線」といいます。

発達検査、知能検査の数値が子どもの姿のすべてを表すわけではありませ

ばならないところです。

「生活できる人」という視点

さて、特別支援教育元年、発達障害への理解と支援、対処が大きくクローズアップされる陰で、実は大切なことが置き去りにされそうなことを私は危惧しています。学校教育全般が忘れかけていることでもあるのですが、それが冒頭にあげたお母さんの話なのです。

つまり、養護学校・個別支援学級、通常学級、どういう経路を歩むにせよ18歳で高校または養護学校高等部を出た後、子どもに与えられている人生は、後60年か70年。その長い時間を困らずに充実して生きていけるためには「生活する力」「作業力」がものを言うという事です。

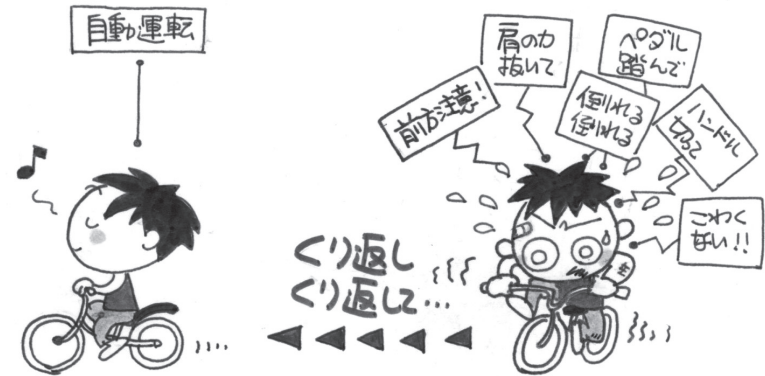
「生活する力」「作業力」は技能、スキル、です。身体的なハンディキャッ

プが大きければ別ですが、スモールストップに分けて手順を丁寧に教え、何度も繰り返し練習すれば次第に身に付くことが多いものです。身に付きやすいように絵カードなどの視覚的な提示を工夫することも有効でしょう。

「身に付く」とは、体が自然に動くという意味合いであり、ワザの記憶回路ができあがったということでもありません。いちいち考えなくても体が自動運転モードになる、つてこと。

自動運転と 枠組みのある生活

たとえば自転車。乗れるようになるまでは、後ろを支えてもらって練習し、曲がろうと思うのと反対の方向に曲がつたり、止まれなくて瞬に激突したり、バランスを崩して転んだり、それはそれは大変です。やっと乗れるようになって、しばらくの間はハンドルにし



なります。

これは、自転車運転のワザ、つまり、バランスのとおり方やカーブの曲がり方、ブレーキのかけ方などがしつかり脳のメモリーに記憶され、自動運転モードが作動するようになった証拠です。

知的な障害があっても、発達障害があっても、作業能力、技術的な面は、反復経験によって身に付くもの。であればこそ、お風呂の入り方、靴のそろえ方、食事の食べ方、洗濯もののたたみ方、料理の作り方など、生活上のスキルを、意識的に教え、身に付けさせてあげたいものです。なぜなら、自動運転モードの部分が多ければ多いほど、脳のメモリーをもっと大切な、新しいことに挑戦したり、考えたりすることのために使えるからです。

一つずつの作業スキルもそうですが、生活全般が規則的に運ばれていくのも大事なことです。学校から帰ったら靴

をそろえる、お便りを出す、宿題をする……など、この次にはこれをするという順番の決まった、枠組みのある生活は、安定・安心を与えます。いつ

なんどき、何をしてもいい生活は、自由度が高くていいようにも見えますが、実のところ子どもの気持ちを不安定にもするのです。

きちんと決まった生活の枠組みを作ること、自閉症のお子さんへの対応の仕方として有名なTEACCH（ティーチ）が提唱する「構造化」でもあります。

まず「型」から入るって 守破離

先日、ある教育関係者とそんな話をしていたら、その方は「僕は、剣道の先生からそれと同じようなことを教わりましたよ、守破離（しゅ・は・り）ということばで」とおっしゃいました。

守破離とは、物事を習得する三つの段階のこと。もともとは茶道で使われ始めたことばだそうです。

「守」とは師匠が伝える「型」を正確に身に付ける学びの段階。手順を繰り返して身に付けるための単純な反復練習。基本の「き」の時期。

「破」とはそれまでに身に付けた技や形をさらに洗練させ、自分らしきを作り出して行く時期。

「離」は、それらを基礎に自分らしいやり方を確立させる最終段階のこと。家の中のことや、仕事の手順、生活は芸術・芸能や武道のように「独自の境地を創造する」必要はそれほどありませんから、せいぜい「守」「破」あたりで用は足りるでしょう。

最初の「守」の段階で、基本の「き」をいかに美しく、完璧に身に付けるかが、その後の発展に影響するのは言わずと知れた。はじめに出会う師匠が優

れた人で、正しく美しい型を伝えてくれればこそ、弟子は美しく伝承していきますというものです。幼児期の家庭教育こそ、というわけです。

家庭教育は大切だ、道徳意識、規範意識は家庭でのしつけだと言われます。上から言われると何となく反発してしまう私ですが、でも、一人で生活していける子になるために、自動運転できることのレパトリーを増やすようなかわりが、結果的に子どもの自由裁量の余地を増やし、自立した生活を保障するのだということについては全く異議なしです。

保健分野では保護者に対するお説教めいたことは禁忌になってきているような風潮もありますが、「将来、きっと子どものためになるから……」という観点で生活習慣の見直しをアピールする工夫ができないかなあと思っています。